

其事俾來浴者有考焉、於是乎書刻之石、

天保壬辰歲孟冬

仁井田好古撰

熊野温泉

〔十寸穗の薄四〕奉妻郡温泉 熊野湯ノ峯ノ温泉、世所謂眞熊野湯是なり、温泉論曰、紀州湯峯温泉、其色皎潔、其味微鹹而甘、頗有鐵臭、其氣極熱云、湯ノ峯藥師堂五間四面、豐臣秀吉建立、藥王山東光寺と稱、本尊藥師佛は、昔温泉の泡凝而成石、色黒し、其化石をもて藥師如來の坐像に造る、往古は此藥師の胸、間より温泉涌出なり、右、胸ノ間湯、穴一ツ、御光の内湯穴二ツ有之、温泉四坪、みな竈にて湯を引、東光寺の庭ノ内東の方巖穴より湯涌出を竈にて取之、上の湯と稱す、不斷留湯なり、温泉湯口は熱氣甚強く、近邊湯煙立昇りて、霧の如く空曇時は尙甚し、湯口にて食物を煮、或は白米を布袋に盛て湯口に浸置ば、暫時飯と成、但諸物の内に大根ばかりは煮ても難煮といふ、其理は得會しがたき耳、

〔夫木和歌抄二十六〕紀伊まくまのミクマノ同事也

俊頼朝臣

まくまの、ゆこりのまるをさすさほのひろひゆくらしかくていとなし

〔夫木和歌抄二十六〕紀伊ましらくのうらのはしりゆ

仲實朝臣

ましらくのうらのはしりゆうらさめていまはみゆきのかげもうつらす

〔類聚名物考 地理三十五〕伊豫温泉 いよのいでゆ

〔河海抄二〕空蟬いよのゆげたも、たどくしかるまじうみゆ、

伊與のゆのゆげたはいくついさゑらすや、かすへすや、かすへすよますや、そよや、君ぞゑるらん

や、雜藝、伊與湯、

温泉記云、豫州温泉者、其勝冠絶於天下、其名著聞人中矣、纍々出自山頭、潺々迨于海口、中底白砂潔、

四隅青岸斜、朝宗是幾許、辭海二三里、觀其温泉、上下區以別焉、以卒貴賤不混誑、故也、上則構廊宇、開

伊豫國  
道後温泉